事例 02

妹背牛町

～人輝き・笑顔あふれるまち・もせうし～

黄金に輝く稲穂

町の素顔

人　口	2,840人（R2.9.30）
高齢化率	46.6%（R2.9.30）

北海道では3番目に小さな山のないまち。季節による寒暖の差が大きい日本海側の内陸気候で、米づくりを主体とした農業が基幹産業。

担当部署　妹背牛町健康福祉課

事例に関するワンポイント

- 高齢独居世帯率：15.5%（平成27年）
- 要介護認定率：16.4%（平成27年）
- 高齢者の社会参加への意向は、参加したい・参加していないが半々
- 町内に介護事業所がない

通所型サービスBを始めたきっかけは、平成25年9月の「Aコープもせうし店」の閉鎖で、閉鎖後の空き店舗の利活用を関係各機関で検討したものの結論が出ませんでした。ちょうどその頃、妹背牛町社協が「地域福祉実践計画」（※1）の策定を行っていたこともあり、住民から「住民が集まる拠点にしたい」という意見が出されたことを踏まえ、町が旧店舗を改装し「わかち愛もせうしひろば」が誕生しました。また、拠点の運営については、有志やボランティアだけでは継続が難しいと判断され、集まった住民により（特活）わかち愛もせうしが設立されました。

同法人の最初の活動は、人が集まるためには食べるところが必要という視点から「わかち愛もせうし食堂」をオープン。徐々に人が集まるようになり、次のステップとして、住民自らインストラクター資格を取得して「ふまねっと」が始まるなど、現在に至っています。

当初、役場内では「国から『総合事業をやりなさい』と言われてもね…」というようなやや消極的な雰囲気があったものの、住民に通所型サービスBへの移行を打診し、共に勉強会を重ねていくうちに、役場もきちんと支援しようということになりました。同ひろば内にあるテーブルやソファなどの備品は、町内にある温泉入浴施設「ペペル」からの払い下げ品を利用していることも含め、「空き店舗の発生」、「住民からの発意」、「総合事業への移行期間」と重なったことで「非常にタイミングが良かった」（健康福祉課 河野課長）といえます。

また、同法人への助成金は年間約100万円で、町財政への影響はほとんどないことに加え、正確な要因は不明なものの「介護保険の負担が減っていることが確認され、通所型サービスBによる効果かもしれないので、今後精査したいと思っています」（同）高齢化率は今も上昇中ですが、状況によっては、来年（第8期）から介護保険料が下がる方向で改定される可能性があるそうです。

わかち愛食堂

（※1）地域福祉実践計画…社会福祉協議会が、住民主体により中長期の視点で策定する計画で、計画の名称は北海道独自のもの。

（特活）わかち愛もせうし

所在地 雨竜郡妹背牛町字妹背牛5200番地
代表者 水上　明
スタッフ数 21名
会員数 正会員21名
賛助会員　個人118名　団体17
会費 正会員2千円
賛助会員　個人2千円　団体5千円
事業規模（収入ベース） 3,164千円（平成31年度）
法人化 平成26年

旧Aコープ店舗だった外観

（特活）わかち愛もせうしは、前頁のとおり「わかち愛もせうしひろば」の管理運営を主体とする団体ですが、同ひろばを拠点に妹背牛の情報発信を行う「まちの駅機能の活用を図る事業」や交通安全運動期間中に実施する「地域の安全の啓発を図る事業」なども行っています。

最初に始めた「わかち愛もせうし食堂」（週1回）は、週替わり定食（500円）を提供しており、調理場の担い手は60～80代のボランティアです。

わかち愛ひろばもせうしの様子

最近のひろばの利用状況

曜日	月	水	金
AM	総合事業（運動）（12～13名）	ふまねっと（約15名）	サロン「ほっと茶屋」
11:30～14:00	食堂の営業		
PM	総合事業（交流）（12～13名）		いきいき100歳体操
夕方	夕暮れサロン ※第3週のみ		

同ひろばで実施している通所型サービスBは、総合事業に移行する前と後では、利用者の延べ人数が約4倍に増えています。

利用者は、地域包括支援センターだよりや口コミ、他機関からの紹介等で増えています。作業療法士等の専門職の派遣を受けるとともに、社会福祉協議会のサロン等と共同での実施、ふまねっとインストラクターやいきいき百歳体操サポーターの協力で運営されており、新たに町内歯科医院との事業も平成29年3月に実施し、今後も継続することとなっています。

また、ひろばは道路側の窓が大きく、外から中がよく見えることもあり、「何かやってるね、参加してみたい」という声をお聞きすることがあるそうですが、他の地域のサロン同様に女性の利用が多く、男性の利用が少ない状況にあることから、ビールとおつまみを提供する「夕暮れサロン」を月1回開催し、男性の参加を促す工夫も行っています。利用者の自宅とひろばとの移動手段は、徒歩か、農村部に居住している人は定額制のタクシーを利用しています。

人材確保については、利用中から支援者になってもらえるような働きかけを検討するとともに、将来担い手が不足してくることがはっきりしているので、5年後、10年後の保険をかけているもりで活動しています。